

事後評価報告書(日-フランス研究交流)

1. 研究課題名:「対話型モバイル拡張現実体験(AMIE):メンテナンスサービスへの応用」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:独立行政法人産業技術総合研究所サービス工学研究センター

研究チーム長 蔵田 武志

2-2. 相手側研究代表者:ジョセフフーリエ大学グルノーブル情報学研究所 教授 Nigay Laurence

3. 総合評価:(B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

日本側の歩行者推測航法、AR トラッキング技術の研究成果とフランス側のインタラクション技術が組み合わせることで新しい応用成果を生んだ。

AR カメラトラッキング技術のベンチマークにおける標準規格を目指した NWIP (New Work Item Proposal) が、ISO IEC/JCT 1/SC 24/WG 9 において承認された。汎用基盤技術開発が目的であれば、提案書もそのような内容にすれば違和感がなかったと思われる。研究活動において 6 編のジャーナル論文と 7 編の口頭・ポスター発表が共著でなされた。

本プロジェクトの新規性は、共同作業や協調作業など、工場内のメンテナンスサービス特有の問題にあると思われるが、論文は、メンテナンスに関するものが極めて少ない。また、本分野での技術革新のスピードは速い。Google などが行おうとしていることと比較した研究成果の新規性が報告書からは読み取れなかったのが残念である。

(2)交流成果の評価について

双方の研究者が相手国の研究室を訪問するなど、お互いが刺激を受ける好ましい研究環境が構築されていたようである。また、インターネット会議を持つなどの、お互いのコミュニケーションを取るための工夫も評価できる。ただし、従来から十分な研究のアクティビティがあり、この日仏の交流が直接の寄与がより明確になっているとよかった。

共同研究のための相手方への滞在は、日本から 3 件があるが、フランスから日本への来訪は、学会に合わせたもののみであった。交流がなければ達成されなかった成果というのは多くなく本プロジェクトの主旨から考えると、より活発な人的交流が望ましい。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

交流期間内に発表された論文は多数あり、そのうち 2 件が Best Paper Award などの賞を受賞していることは評価できる。

企業も参加しているプロジェクトなので、特許出願を進めてほしい。